

Herman Melville の “The Paradise of Bachelors and the Tartarus of Maids” について

岡 村 仁 一

1. はじめに

Melville の短篇, “The Paradise of Bachelors and the Tartarus of Maids” は一般に他の二作品, “The Two Temples” 及び “Poor Man’s Pudding and Rich Man’s Crumbs” とともに「二枚折り小説 (diptychs)」(Leyda, xx) と称されている。その特徴は同一の語り手による, 一方が米国, もう一方が英国を舞台とする二つのパートから一つの物語が出来上がっているところに見られる。これまで論者は “The Two Temples” 及び “Poor Man’s Pudding and Rich Man’s Crumbs” について, 二枚折り小説ならではの利点を活かした技法とテーマ設定について論じてきたが, 今回採り上げる “The Paradise of Bachelors and the Tartarus of Maids” は前に採り上げた二作品以上に, 二枚折り小説という形式でなければ成立しえない巧みな技法が用いられ, 深遠なテーマ設定がなされているように思われる。その点を本論で検証していきたい。

2. “I. THE PARADISE OF BACHELORS”

表題にある「独身男たちの楽園」とは如何なる場所なのか? 「それはテンプル門からほど遠からぬところにある。(It lies not far from Temple-Bar.)」(316) という一文でこのパート I は語り始められる。物語を読み進めるうち, 「それ」とは中世のテンプル騎士団 (Templar) に由来する, ロンドンにある「テンプル法学院 (The Temple)」(318) を指していることが判明するのだが, その所在地は「炎天下の平原から, どこか小高い丘に囲まれた涼陰の幽谷に足を踏み入れた感じ (like stealing from a heated plain into some cool, deep glen, shady among harboring hills)」(316) だと表現されている。ここでこの「テンプル法学院 (The Temple)」と対照的な場所として登場するのが, 「炎天下の平原」に喩えられているロンドンの「フリート通り (Fleet Street)」(316) で「既婚の商人や職人たちがパンの値上がりや赤ん坊の出産に気を取られて, 額に釣り糸のような長い皺を寄せながら急ぎ足で歩いている通り (where the Benedick tradesmen are hurrying by, with ledger-lines ruled along their brows, thinking upon rise of bread and fall of babies)」(316) だと説明されている。ここに登場する “Benedick” とは『リーダーズ英和辞典 (第2版)』によると, 「ベネディック (Shakespeare, *Much Ado about Nothing* の登場人物; 女性と結婚とを非難し, 辛辣な舌戦を演じていながら, 最後に Beatrice と結婚する); [b—] 長い間の独身主義をすてて結婚した男」とある。ここに先ず独身者 (bachelor) 対既婚者 (benedick) という対比が見られ, 同時に独身者の快樂に対し, 既婚者の心痛・苦役が暗示されているのである。

テンプル法学院の立地については更に次のように記述されている。

Sweet are the oases in Sahara; charming the isle-groves of August prairies; delectable pure faith amidst a thousand perfidies: but sweeter, still more charming, most delectable, the dreamy Paradise of Bachelors, found in the stony heart of stunning London. (316)

サハラ砂漠のオアシスは気持ちが良い。八月の草原の、小島のような叢林も魅力に満ちている。また数多の背信行為に混じっている純粋な信仰も素晴らしい。しかしこれらにもまして気持ちが良く、魅力に富み、この上なく素晴らしいものは、耳を聳するロンドンの、石で覆われた中心街に見いだされる夢の楽園、「独身男たちの楽園」であろう。

このような既婚者のせわしい暮らしや世間の喧噪から隔たった居心地の良い場所に「独身男たちの天国」であるテンブル法学院は立地している。パート I での“Paradise”との比較対象は、パート II に登場する“Tartarus”ではなく、巷での世間一般の暮らしぶりなのである。ここに上層の有閑階級と下層の庶民階級という二層の図式が見て取れる。

続いて語り手はテンブル騎士団員の歴史に触れる。語り手は「テンブル騎士団員は“時”の魔法使いの杖に打たれて、今日弁護士となったのである (Struck by Time's enchanter's wand, the Templar is to-day a Lawyer.)」(318) と説明し、「両手で振り回す長剣は片手で扱う驚ペンに (the long two-handed sword to a one-handed quill)」(317) 変わり、「かつての兜は今やカツラになっている (The helmet is a wig.)」(318) のだ、とその変貌ぶりを表現している。この変貌は、先ず「世俗化 (secularize)」及び「墮落 (degenerate)」という語を用いて、マイナスのイメージとして以下のように描写されている。(なお、ここに「快楽者」の喩えとして Anacreon が用いられているが、この場面では些か唐突な登場であり、さして必須とも思えない。これは実はパート II への伏線になっているのだが、その点は後に検証する。)

But for all this, quite unprepared were we to learn that Knights-Templars (if at all in being) were so entirely secularized as to be reduced from carving out immortal fame in glorious battling for the Holy Land, to the carving of roast-mutton at a dinner-board. Like Anacreon, do these degenerate Templars now think it sweeter far to fall in banquet than in war? (317)

しかしこういった事実にもかかわらず、テンブル騎士団員たち（仮に今なお存在しているとして）が完全に世俗化して、聖地パレスチナを守るための栄えある戦いで不滅の名声を刻み込むことから、食卓で羊の焼き肉を切り刻むまでに墮落してしまったと知ると、これはわれわれにとって誠に意外なことであった。アナクレオンのごとく、これら墮落したテンブル騎士団員たちは戦いに倒れるよりも宴会で倒れる方が遙かに甘美であると考えているのだろうか？

その一方、「このテンブル騎士団員の転落は本人をより洗練された存在に変貌させた (the Templar's fall has but made him all the finer fellow)」(318) というプラスの視点から見られていることは注目に値する。この点に関して語り手は以下のように言う。

I dare say those old warrior-priests were but gruff and grouty at the best.... But best of comrades, most affable of hosts, capital diner is the modern Templar. His wit and wine are both of sparkling brands. (318)

敢えて言わせて貰うと、こういった古の僧兵どもも、せいぜい粗野でがさつだったというだけではないのか？・・・これに反して現代のテンブル騎士団員は、友としてもっとも優れ、饗宴の主催者として最も愛想良く、かつ晩餐の客人として一流の存在なのだ。その機知とワインは、どちらもまばゆいばかりに煌めいている。

つまりテンブル騎士団員の役割は、好意的に解釈すれば、かつての野蛮な戦の担い手から今は平和な文化の担い手へと変貌を遂げたということになる。その観点から以下のような記述も見受けられる。

It is a thing which every sensible American should learn from every sensible Englishman, that glare and glitter, gimcracks and gewgaws, are not indispensable to domestic solacement. The American Benedick snatches, down-town, a tough chop in a gilded show-box; the English bachelor leisurely dines at home on that incomparable South Down of his, off a plain deal board. (320)

趣味の良いアメリカ人がおしなべて、趣味の良いすべての英国人から学び取るべきこと、それは、家庭的な心の安らぎには、ぎらつくような金びかも、見かけ倒しの安びかもは不可欠ではないということだ。アメリカの新婚男は繁華街に出かけ、派手な席に陣取って、厚切りの肉をがつがつ食べるが、英国の独身男はわが家であって、飾りも何もない松材の食卓で類い希なる自前のサウスダウン（羊の肉）料理をゆっくりと味わうのだ。

ここには、再度登場した “Benedick” のがさつきに対し、“bacheor” の洗練ぶりが伺えるのである。

その後、テンプル法学院では「全て独身の九人の紳士が集まり、食卓に着き (There were nine gentlemen, all bachelors, at the dinner.)」(320)、今回、語り手が招待された晩餐が始まるのであるが、食事が一段落すると、「彼らにはありとあらゆる楽しい話を語って聞かせてくれた (They related all sorts of pleasant stories.)」(321) と語り手は述べている。以下の引用箇所には参集した独身紳士たちの話の内容、つまり彼らの趣味と教養が示されている。

One told us how mellowly he lived when a student at Oxford; with various spicy anecdotes of most frank-hearted noble lords, his liberal companions. Another bachelor, a gray-headed man, with a sunny face, who, by his own account, embraced every opportunity of leisure to cross over into the Low Countries, on sudden tours of inspection of the fine old Flemish architecture there—this learned, white-haired, sunny-faced old bachelor, excelled in his descriptions of the elaborate splendors of those old guild-halls, town-halls, and stadthold-houses, to be seen in the land of the ancient Flemings. A third was a great frequenter of the British Museum, and knew all about scores of wonderful antiquities, of Oriental manuscripts, and costly books without a duplicate. A fourth had lately returned from a trip to Old Granada, and, of course, was full of Saracenic scenery. A fifth had a funny case in law to tell. A sixth was erudite in wines. A seventh had a strange characteristic anecdote of the private life of the Iron Duke, never printed, and never before announced in any public or private company. An eighth had lately been amusing his evenings, now and then, with translating a comic poem of Pulci's. He quoted for us the more amusing passages. (321-22)

ある紳士は、紳士の名に恥じぬ友人である腹藏のない貴公子たちの様々な気の利いた逸話を交えながら、オックスフォードの学生時代にどんなに甘美な生活を送ったかについて話してくれた。もう一人の紳士は、白髪混じりで愛想が良く、彼自身の話によると、あらゆる暇な機会を捉えては、フランダースの立派な古い建築の視察に馳せ参じるため、ベネルックス三国の低地国に渡るのだそうだが、この学識豊かで白髪の、愛想の良い老独身者は、フランダース地方に古くから残っている中世ギルドの集会所や市役所、あるいは総督官邸の精巧な建築の壮麗さについての説明に秀でていた。第三の紳士は大英博物館に足繁く通う男で、数多の素晴らしい古代の遺物や東洋の写本、それから複製の無い高価な書物等についてありとあらゆることを知っていた。四番目の紳士は旧グラナダ旅行から最近帰ってきたばかりで、言うまでも無くサラセンの風景を目に見えるように話してくれた。五番目の紳士は変わった訴訟事件を話してくれた。六番目の紳士はワインについての造詣が深い。七番目の紳士は、これまで一度も出版されたことのない、また公私を問わず、如何なる席でも披露されたことのないウェリントン公爵の一風変わった、如何にも公爵らしい私生活上の逸話を話してくれた。八番目の紳士は、最近、時々イタリアの詩人プルチの滑稽詩を翻訳しては、夜会を楽しませてくれた人だが、我々のために更に面白い一節をいくつか引用してくれた。

ここに登場する八人の独身男たちはいずれ劣らぬ良い趣味と高い教養の持ち主で、退屈な男など一人も存在しない。しかしながら、この独身男たちの世間から隔絶した暮らしぶりは Fisher から「独身のテンプル騎士団員たちは依然として修道士としての本来の姿を世俗化した形で保持し続けている (the bachelor Templars... still maintain a secular facsimile of their monkish origins)」(84) と批判されている。とはいえ、「パンの値上がりや赤ん坊の出産」を日々心配する暮らしからは高度な文化は生まれない。それゆえ、

The thing called pain, the bugbear styled trouble—those two legends seemed preposterous to their bachelor imaginations. (322)

苦しみと呼ばれるもの、悩みごとと称される化け物—この二つの伝説は、彼ら独身者の想像力にあっては実に馬鹿げたこととしか映らないのだ。

という、とかく問題視される記述も、プラスの側面で捉えると、独身者たちの気楽な落ち着いた心理状況が文化を生む素地となっていると捉えることが出来るのである。

It was the very perfection of quiet absorption of good living, good drinking, good feeling, and good talk. We were a band of brothers. Comfort—fraternal, household comfort, was the grand trait of the affair. Also, you could plainly see that these easy-hearted men had no wives or children to give an anxious thought. Almost all of them were travelers, too; for bachelors alone can travel freely, and without any twinges of their consciences touching desertion of the fire-side. (322)

これぞよき生活、よき飲酒、よき気分、よき談話を静かにたっぷりと味わうことを成就した姿であった。我ら一連のともがら。気楽さ—兄弟同士の家族的な気楽さこそ、この酒盛りの見事な特徴をなすものであった。またこれではっきりと見て取れたことであろうが、これら気楽な男性たちは、余計な心配をせねばならない妻子がいない人たちなのだ。彼らのほとんどすべては同時に旅行家でもあった。なぜなら独身男のみが自由気ままに、また炉辺を捨てることの良心の疼きを覚えることなしに旅行できる人たちだからである。

この文化の担い手としての側面に注目すると、独身者をあながち否定ばかりはできまい。事実、この作品が成立したのも、その背景に作者 Melville が、旅行家（一時的な独身者）として実際テンプル法学院を訪れた際の体験が素地となって活きているからなのである (Melville, *Journals* 43-46)。

更に独身男たちを評価する以下の描写からは、独身男たちの紳士ぶりも覗える。

The remarkable decorum of the nine bachelors—a decorum not to be affected by any quantity of wine—a decorum unassailable by any degree of mirthfulness (322)

九名の独身者たちの驚くべき礼儀正しさ—彼らはどんなに痛飲しても取り乱すことがないし、どんなに愉快にやっても羽目を外すことはない

このように見てくると、独身紳士の良い面に主眼を置いてきた語り手が、最後に感想を聞かれて、「これはまさに独身男たちの楽園ですね！ (Sir, this is the very Paradise of Bachelors!)」(323) と答えてこのパートを終えているのも頷ける。しかしながら作品全体で作者 Melville が意図した真意は、独身者礼賛のパート I のみを見ていたのでは伝わらない。

3. “II. THE TARTARUS OF MAIDS”

「それはニュー・イングランドのウードロウ山からほど遠からぬところにある。(It lies not far from Woedolor Mountains in New England.)」(323) という書き出しでパート II の物語は始まる。この “It lies

not far from...”という形はパート I の書き出しと全く同じであり、読者は否応なくパート I との比較を意識し、この “It” の正体へと興味を惹かれる構造となっている。そしてパート I での比較対象が世間一般と “Paradise” であったことを思わせる様に、ここでも世間一般とこの “It” との比較に読者の注意を向けていく展開となる。実際、語り手は「その昔、どこかこの辺りに独身狂女の掘り立て小屋が建っていたという言い伝え (the tradition of a crazy spinster’s hut having long ago stood somewhere hereabouts)」(323) や「狂女のふいご (the Mad Maid’s Bellows’-pipe)」(323)、「黒峡谷 (the Black Notch)」(324)、「悪魔の土牢 (the Devil’s Dungeon)」(324) という土地の人たちの呼び名を紹介し、世間一般がこの辺りをどのように見ているのか、まさに巷と隔絶した世界、巷と比較対象になる世界としてこの “It” に迫っていく。しかし既にタイトルが示している様にパート I と異なり、今回向かうのは “Tartarus” であることを読者は意識しており、パート I に見られた、上に位置する “Paradise” とその下に来る庶民の暮らし、という二層構造がこのパート II では逆転し、庶民一般から見下される “Tartarus” であるらしいことが、“a crazy spinster’s hut” の言い伝えや “the Mad Maid’s Bellows’-pipe” と名付けられた地名に早くも現れている。つまり世間一般から差別される対象としての “spinster” や “maid” の存在が注目されるのである。

そして物語を読み進めていくと、やがて冒頭に登場した “It” の正体が明らかになる。

At first I could not discover the paper-mill...Where stands the mill? Suddenly a whirling, humming sound broke upon my ear. I looked, and there, like an arrested avalanche, lay the large white-washed factory. (326)

最初、製紙工場はなかなか見つからなかった。…製紙工場はいったいどこに建っているのだろうか？すると突然、何かがヒュンヒュン回り、ブンブン唸る音が耳に押し寄せてきた。その音のする方に眼を向けてみると、なるほどそこには、雪崩が途中で食い止められたかの様な白壁作りの大きな工場が横たわっていた。

「長々と横たわる切妻の高い工場の本館が・・・ちょうどテンプル教会が回りの事務所や寄宿舎に取り囲まれていると同様、周囲の密集する別棟や寄宿舎に囲まれて建っているのを目にした (saw the long, high-gabled main factory edifice, with a rude tower...standing among its crowded outbuildings and boarding-houses, as the Temple Church amidst the surrounding offices and dormitories)」(326) 語り手は思わず「これはまさしく、“独身男の楽園”の相手役であろうが、それにしても、雪に埋もれ、霜に覆われて、ついには一個の墓と化しているとは (This is the very counterpart of the Paradise of Bachelors, but snowed upon, and frost-painted to a sepulchre.)」(326-27) とつぶやく。ここで初めて比較対象がパート I の “Paradise” に転じ、同時に「墓 (a sepulchre)」という語を用いることにより、“Paradise” とは対照的な “Tartarus” に通じる世界にこれから入っていくことが暗示されるわけであるが、いきなり “Paradise” と “Tartarus” を比較するのではなく、“Paradise” と庶民の暮らし、庶民の暮らしと “Tartarus” といった具合に巷の世界を仲立ちとして比較の度合いが深化していくところに、この両者の溝がいかに深いかが伺える。

こうして “Tartarus” の世界に足を踏み入れた語り手は、偶然通りかかった女性従業員に声を掛ける。

Pausing, she turned upon me a face pale with work, and blue with cold; an eye supernatural with unrelated misery. (327)

彼女は立ち止まり、仕事で蒼ざめ、寒さで血の気の失せた顔を私の方に向けた。眼はとてもこの世のものとは思えず、言葉にならぬ惨めさを漂わせていた。

先ほどの “sepulchre” という語と相俟って、この「この世のものとも思えぬ (supernatural)」という語の使用により、語り手共々読者も巷の世界から “Tartarus” へと連れて行かれるのである。

そして最終的に「乙女たちの地獄 (Tartarus of Maids)」と呼ばれることになる製紙工場に到着した語り手は、最初に「広い仕事場 (a spacious place)」(328) に入り、先ず女性従業員たちによる紙折作業を目に

することになる。

At rows of blank-looking counters sat rows of blank-looking girls, with blank, white folders in their blank hands, all blankly folding blank paper. (328)

単調なカウンターが幾列にも並び、それに向かって座っている娘たちも生気のない蒼白の顔で、誰もかも白い手に単調な白い紙折り器を持ちながら、白い紙を虚ろな表情で折り続けていた。

ここでは“blank”という複数の意味を持つ単語を繰り返し使用することにより、“blank”の意味する「単調さ」や「蒼白さ」、「虚ろさ」が重層的にいや増すという相乗効果が現れている。

次に語り手の目は同じ仕事場で「ピストンに似た縦型の物が重たそうな台木の上で周期的に上下運動を繰り返している (a vertical thing like a piston periodically rising and falling upon a heavy wooden block)」(328) バラの花環の押印作業へと向けられる。ここで語り手は「私はバラ色の紙から蒼白い娘の頬へと目を向けたが、何も言わなかった (I looked from the rosy paper to the pallid cheek, but said nothing.)」(328)とあり、この光景を見て抱いたであろう感想を押し殺している。女性従業員が作っている華やかな製品と、女性従業員たちが置かれた荒涼とした境遇を余りにも鮮明に対比しているように思え、言葉を失ったとも考えられるが、かくのごとく語り手が(あるいは作者 Melville が)何も語らない、何も行動を起こさないことを批判する研究者もいる。(例えば Bickley は語り手について「批判を差し控えるのであれば、彼は“Poor Man’s Pudding and Rich Man’s Crumbs”の語り手と同類である (in withholding criticism, he is similar to the narrator in “Poor Man’s Pudding and Rich Man’s Crumbs”）」(94)と言っている。)しかし語り手が敢えて何も言わない理由は、いくら語り手が声高に何ものかに対する批判であれ、怒りであれ、称賛であれ、を口にしたところで読者が何も感じてくれなければ、結局無意味であることが判っていたからではあるまいか? 読者に一体何を感じて欲しいのかは物語を最後まで読み進めてみないと判らない。

この場で女性従業員と機械との関係を見た語り手は、内々次のような感想を抱いている。

Machinery—that vaunted slave of humanity—here stood menially served by human beings, who served mutely and cringingly as the slave serves the Sultan. The girls did not so much seem accessory wheels to the general machinery as mere cogs to the wheels. (328)

機械—人間ご自慢の奴隷としての機械が、ここでは人間たちを召使いにして使用していた。そして人間たちは、サルタンに仕える奴隷のように、無言でへつらいながら奉仕しているのだ。ここで働いている娘たちは、機械全体に付いている歯車と言うよりはむしろその歯車の単なる歯という感じだった。

更に語り手は野線を引く作業に注目する。その場面は「私は最初の娘の額をみてみた。それは若々しくて色白だった。つぎに反対側の娘の額をみてみた。それは野が引かれて皺が寄っていた (I looked upon the first girl’s brow, and saw it was young and fair; I looked upon the second girl’s brow, and saw it was ruled and wrinkled.)」(328)と描かれている。既にパートIIの冒頭にそれぞれ登場していた“maid”と“spinster”のこの場での対比には、差別的な“spinster”という語に見られるごとく、独身女性の年齢を経た末路が暗示されている様に思われる。

これら一連の作業を見終えた語り手は、女性従業員たちの間で「(an old bachelor,)」(334)を意味する“Old Bach” (330)と呼ばれているこの製紙工場の「筆頭経営者 (the principal proprietor)」から突然「あなたの頬が凍傷に罹っていますよ (your cheeks are frozen)」(328)と指摘され、「すぐに感覚の戻りかけた頬は引き裂くような痛みを感じた。二匹の痩せこけた猟犬がそれぞれ片方ずつの頬に噛みついていて、さしずめ私はアクタイオンといった感じだった (Soon a horrible, tearing pain caught at my reviving cheeks. Two gaunt blood-hounds, one on each side, seemed mumbling them. I seemed Actaeon.)」(329)とその場の状況を説明している。Actaeonとは『新英和大辞典第6版』によると、「【ギリシャ・ローマ神話】アクタイオン【Dianaが水を浴びている姿を見たため彼女にのろわれて鹿に変身させられ、自分の

獵犬に噛み殺された獵師】」である。パート I にこの語と頭韻を踏んだ Anacreon (317) が既に登場し、それと呼応する様な位置に置かれていることで、この Actaeon の登場は読者に唐突な感じを与えない。そしてこの Actaeon の方にこそ、作者 Melville の重点は置かれている様に思え、罰を受けることを承知の上で、敢えて女性の裸体を既に見てきており、これからも見ていくことを暗示しているように思える。

語り手は Old Bach に「工場全体を見学したいので案内を頼むと懇願 (begged to be conducted throughout the place to view it)」(329) する。工場全体の見学は女体全体の見学、つまり女性の体を隅々まで見ようとしていることを暗示している様に思える。ひとつひとつ指摘することは差し控えるが、Fisher は既に「この時点 [パート II の書き出しの時点] 以降工場への道のりはあけすけな生理学的、糞便学的といったいいほどの用語を用いて描写されている (From this point on, the approach to the mill... is described in terms so frankly physiological and so nearly scatological)」(74) と述べている。そして語り手は Cupid と呼ばれる少年の案内で「動力源の水車 (the water-wheel)」(329) から「ぼろ切れ部屋 (the rag-room)」(330)、更には「ついこの秋、一万二千ドルかけて購入した我が社の巨大な機械 (our great machine, which cost us twelve thousand dollars only last autumn)」(331) と Cupid が言うところの「紙の製造機械 (the machine that makes the paper)」(331) へと工場全体の見学ツアーを開始する。

このツアーの中で訪れたぼろ切れ部屋で、語り手は先ず以下のような光景を目撃する。

Before each was vertically thrust up a long, glittering scythe... To and fro, across the sharp edge, the girls forever dragged long strips of rags, washed white, picked from baskets at one side... The air swam with the fine, poisonous particles, which from all sides darted, subtly, as motes in sun-beams, into the lungs. (329-30)

一人一人の娘たちの前ではギラギラ輝く長大な鎌が垂直につきだしていた…。娘たちは傍らに並べられた籠の中から真っ白に洗った細長いぼろ切れを取り上げては、それを鎌の刃に当てて上下に引く作業を果てしなく続ける…。あたりの空気には微細な有毒の粒子が飛び交い四方八方から日光を浴びた埃の様にそれとはなしに人体の肺の中へと飛び込んでゆくのだ。

次にこの部屋の室内環境に語り手の注意は向けられる。

“This is the rag-room,” coughed the boy.

“You find it rather stifling here,” coughed I, in answer; “but the girls don’t cough.”

“Oh, they are used to it.” (330)

「これがぼろ切れ部屋です」と少年は咳き込みながら言う。

「ここにいると息が詰まりそうだね」私も咳き込みながら答える。「しかし娘さんたちは咳をしないね」

「ああ、だってもう慣れっこですから」

更に語り手は先ほどの大鎌に立ち返り、以下のような感懐を抱く。

“Those scythes look very sharp,” again turning toward the boy.

“Yes; they have to keep them so. Look!”

That moment two of the girls, dropping their rags, plied each a whet-stone up and down the sword-blade. My unaccustomed blood curdled at the sharp shriek of the tormented steel. Their own executioners; themselves whetting the very swords that slay them; meditated I. (330)

「あの大鎌は切れ味がよさそうだね」私はふたたび少年の方に向かって言った。

「そうなんです。いつもよく切れるようにしておく必要があるものですから。ほら、見てください！」ちょうどそのとき娘たちの二人が、手にしていたぼろ切れを投げだし、それぞれの砥石を剣の刃に当てて、上下に動かしながら研ぎ出した。私は拷問を受ける鋼の耳慣れぬ悲痛な叫びを聞いて血の凍る思い

がした。彼女ら自身の死刑執行人—自分たちの首を斬り落とす剣の刃を自らの手で研いでいるのだ。私はそう思った。

ぼろ切れ部屋における以上の三場面を総括して Fisher は次のように言う。

The “erected sword” which each girl uses in her work seems to signify that sentence has been passed: prisoners of sex and of society, “through consumptive pallors of this blank, raggy life, go these white girls to death.” In contracting this white death, they seems “their own executioners.” (88)

乙女たちのそれぞれが自分の仕事に用いている「垂直に立った鎌」は、既に刑は確定し、性と社会の囚人として蒼白の乙女たちは肺病に病んだこの蒼白なぼろ切れ状態の人生を経て死へと赴くということを意味している様に思え、この蒼白の死と契約を交わす際、彼女らは自らの死刑執行人となっている様に思える。

ここで男性器を思わせる大鎌に奉仕する乙女たちは、男性の性的悦楽に奉仕するのみならず、自らぼろ切れと化し、次の世代を生み出す原動力として、社会にも奉仕し続ける存在として描き出されているのである。更に語り手と Cupid は巨大な紙の製造機械の見学に向かう。

“There”, said Cupid, tapping the vats carelessly, “these are the first beginnings of the paper; this white pulp you see. Look how it swims bubbling round and round, moved by the paddle here. From hence it pours from both vats into that one common channel yonder; and so goes, mixed up and leisurely, to the great machine. And now for that.” (331)

「ほら」と、キューピッドは大樽を無造作に叩きながら言う。「これは紙の一番の元になるものです。いいですか、この白いパルプがですよ。そらね、ここにある大きなへらで掻き回すと、どういう具合にぶくぶく音を立てながらぐるぐる泳ぎ回るのがご覧になって下さい。次にそれがこの二つの大樽から向こうの一つの導管の中に流れ込み、混ざり合いながらゆっくりとあの大きな機械に辿り着きます。今度はそれを見てみましょう。」

この巨大な紙の製造機械が象徴しているものは何なのであろうか？ Dillingham は「紙製造機械の描写は妊娠、懐胎期間、分娩のほのめかしに満ちている (the description of the paper machine is pervaded with allusions to conception, gestation, and childbirth)」(201) と言っている。だとすると、次の記述は女性の子宮を描写していると考えられる。

He led me into a room, stifling with a strange, blood-like, abdominal heat, as if here, true enough, were being finally developed the germinous particles lately seen. (331)

彼は私をある部屋に案内した。そこは血液や腹腔を思わせる異様な温かきで息が詰まりそうだった。今見てきたばかりの胚珠細胞はあたかもここで最終的に成長していくのか、と思わせる様な場所であった。

Cupid の説明を受け、語り手はその目で目撃した、新生児の臍の緒の切断を思わせる「紐をパチンと切った様な (as of some cord being snapped)」(332) 「鋏の音 (a scissory sound)」(332) がして「9分きっかり (Nine minutes to a second)」(332) でパルプから紙ができあがるという事実もまさに人間の懐胎期間とその誕生の瞬間を暗示していると捉えられる。

こうして一連の見学を終えた語り手は「女性従業員は年齢の如何を問わず、婦人たちと呼ばれずに、見境無く娘たちと呼ばれている (female operatives, of whatever age, are indiscriminately called girls, never women)」(334) という事実に気づき、Old Bach に質問する。すると以下の様な答が返ってくる。

“For our factory here, we will not have married women; they are apt to be off-and-on too much. We want none but steady workers; twelve hours to the day, day after day, through the three hundred and sixty-five days, excepting Sundays, Thanksgiving, and Fast-days. That’s our rule. And so, having no married women, what females we have are rightly enough called girls.”

“Then these are all maids,” said I . . .

「私どもの工場では、家庭を持った婦人は雇いません。既婚の女性は欠勤が多すぎますからね。私どもは休み無く働く人しか欲しくありません。一日十二時間、来る日も来る日も、年、三百六十五日働ける者でないとね。ただし日曜日と感謝祭、および斎日は省きますよ。というわけで、既婚女性はいませんので、ここの女性たちはみんな娘たちと呼んで差し支えないわけです。」

「するとみんな乙女たち、ということになりますね」と私は言った。

読者は女性従業員の待遇についてのこの発言を聞いてどう思うであろうか？男女平等だと言われている現代であれば、建前上、このようなことを口にする経営者は皆無であろうが、内心、これが依然、本音として残ってはいまいか？まさにここに語り手が、作者が、読者に感じて欲しいことが凝縮されている様に思われる。この二枚折り小説のパート I とパート II の対比によって作者が一番描きたかったことは、実は男と女の対比であるように思える。男女は果たして本当に対等な存在なのだろうか？対等でないとしたら、男と女の最大の違いは何なのか？これについて Leavis は「女性が置かれた苦難の二つの面、即ち男性に苦役を強要されていることと、更にその上生まれつき出産のための体に作られているという苦しみを強要されていること (the two aspects of women’s hardships—being condemned to drudgery by man and to additional suffering as being designed by Nature for child-bearing) (205) に注目している。テンプル法学院の独身紳士たちに見られる様に、男性の場合、女性と異なり独身であり続けることは蔑みの対象となりにくい。製紙工場の “maids” が経営者を “Old Bach” と揶揄するのはその点に対するささやかな抵抗であろう。女性の存在無くしては、人間社会が成り立たないにもかかわらず、女性の一生は、独身を通し、苦役に従事した挙げ句、“spinster” として蔑まれるにせよ、結婚して自ら製紙工場と化し、出産の苦しみを強いられるにせよ、やはり “Tartarus” とは切っても切れない縁で結ばれているのである。

女性問題を考える際、明白な事実であるにもかかわらず、男性と違って女性は「生まれつき出産のための体に作られている」という点は無視されたり意識の外に置き去りにされがちなのだ。その点を克服しない限り、真の男女平等はあり得ない。そのためにこそ、女体の覗き見という非難を敢えて浴びることになろうとも、製紙工場の形を借りて女性の真の姿を克明に描き出そうとしたのがまさにパート II の世界であったと言える。

4. 結び

製紙工場からの帰り道、思わず語り手は「(Oh! Paradise of Bachelors! and oh! Tartarus of Maids!)」(335) と叫ぶ。この叫びが怒りなのか、批判なのか、称賛なのか、はたまた何ものなのか語り手は何も語ってくれない。これを判断するのは語り手と共に「独身男たちの楽園」と「乙女たちの地獄」を旅してきた読者自身なのである。

Works Cited

- Bickley, Robert Bruce. *The Method of Melville’s Short Fiction*. Durham, N.C.: Duke Univ. Press, 1975.
- Dillingham, William B. *Melville’s Short Fiction: 1853-1856*. Athens: Univ. of Georgia Press, 1977.
- Fisher, Marvin. *Going Under: Melville’s Short Fiction and the American 1850s*. Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1977.
- Melville, Herman. *Journals*. Vol. 15 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman*

- Melville*. Eds. Howard C. Horsford and Lynn Horth. Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1989.
- . "The Paradise of Bachelors and the Tartarus of Maids." In *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*. Vol. 9 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*. Ed. Harrison Hayford et al. Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1986, 316-335.
- Leavis, Q. D. "Melville: The 1853-1856 Phase." In *New Perspectives on Melville*. Ed. Faith Pullin. Edinburgh Univ. Press, 1978, 197-228.
- Leyda, Jay, ed. *The Complete Short Stories of Herman Melville*. New York: Random House, 1949.
- 岡村仁一「Herman Melvilleの“The Two Temples”について」『新潟大学教育学部研究紀要』第2巻第2号：人文・社会科学編，2010年。127-134.
- 「Herman Melvilleの“Poor Man’s Pudding and Rich Man’s Crumbs”について」『新潟大学教育学部研究紀要』第3巻第2号：人文・社会科学編，2011年。177-185.
- 『新英和大辞典 第6版』 研究社，2002年。
- 『リーダーズ英和辞典（第2版）』 研究社，1999年。